

赤井二人

すまない。許してほしい。  
弱々しい謝罪の言葉。  
傷だらけのゴツゴツとした手が目の前に迫る。  
焼けるような痛みとともにこの世界は終わった。

薄暗い部屋にカーテンの隙間から光が差し込む。  
目覚めの時だと電子音を響かせるスマホのアラームを止める。  
今日もまたあの夢を見た。  
どうせ何度も夢に出るならおっさんじゃなくてもっといろいろあるだろ。

こちとら多感な性少年ならぬ青少年だぞ。  
そんな事をぼんやり思いながら支度をして朝食をもりもり食って家を出る。

最近では動画配信サイトが便利になったのもあって、母が海外ドラマにドブプリな結果朝が米の白飯からシリアルになった。  
機会があったらいつか箱に入っているテイクアウトの中華料理も食べてみたいとか言ってるが勝手にしてくれ。  
朝、人気のない静かな通学路を一人でゆっくりと歩くのが好きだ。  
まだ半分寝惚けた脳みそが優しい日差しと本のわずかな環境音と肌寒くも心地よい風で少しずつ覚醒していく。

ギリギリまで惰眠をむさぼってパン啜えて走ってるようじゃこの気持ちには分らないだろう。  
ふと目をやると、その穴はあった。つい一週間ほど前からそこに

あった。

人間の頭ほどの宙に浮かぶ穴だ。  
自分はいわゆる、見えないものが見える人種だ。  
とは言っても、その時までには思わなかった。  
それまでに見えてしまった幽霊なんだか妖怪なんだか化け物なんだかよくわからない連中は一瞬見えたと思っただけで消えてしまう。  
気のせいだの勘違いだの言われたら何も言えないし、自分だってそう思っていた。  
だが今回は違う。

自分が本物だと言わんばかりに何度目をそらして見返してもかたくなにそこにあり続けた。  
あんな意味深な夢を何度も見るくらいだし、もしかしたら自分は選ばれた人間だとかにか不思議な力を持つてる人間なのかもしれない。

……本当にそうか？  
今まで16年間生きてきたけど他人と比べて自分が特別だと思っただけなことなんて一回もないぞ。  
頭がいい、足が早い、手先が器用、見た目がイケメン、ごはんをいっぱいいたべる。

人間なにか一つや二つは他人よりも優れてるものを持っているし持っているかないかもしれない。  
それがただ、人には見えないなにかが見えるってだけなのだろう。  
こんな無駄なものに人としてのリソースを消費しているのだとしたらむしろバカバカしくてやってられないよ。  
そんなものが見えるからって人生にプラスになるって事ないだろ。  
そう思っていたが、目の前のこいつはどうも違うようだ。  
始めてそれを見た時は夕方の下校時だった。

通学路の脇になにか黒い穴のようなものが浮かんでいた。

黒い、なにもない、黒い穴だった。

俺はさすがに啞然としたがどうにもその穴のようなものが見えるのは俺だけらしい。

目の前からこつちに向かって走ってくる小学生くらいの子供たちはそのまま黒い穴に突っ込んでいった。

穴と小学生の頭がぶつか……りはしなかった。

いや、ぶつかったのかもしれないが、その小学生は宙に浮かぶ穴をすり抜けてそのままみんな走っていった。

元気な子供たちだと関心するかうるさいガキ共だとうんざりするかでその人物の人と也が分かりそうだななどと意図的に全く関係ない事を考えながらそのまま自分も立ち去った。

そりやそうだ、マジでヤバイじゃん。マジでガチで。

明日には消えているだろう、消えているよね？　なんて祈りながら布団に入って眠りに付いた。

次の日の朝、まあそうでしょうねと当然のように浮かんでいるそれを見て溜息をついた。

こういう時の神頼みってなんか大体叶わないよね。本人も分かかって祈ってるんだけどさ。

とは言えるもんはいるんだし仕方がない。別にあれがなにかしてくる訳でもないし気にしないのが一番だろう。

なんて考えながら穴を見たらその穴の中と言っていいんだらうか。それまでは黒が広がっているだけだった穴の中になにかが見える。

それは……綺麗な空。としか言いようがない。

不思議に思いながら、いつまでもそれを見ている訳にもいかないので足早に学校へ向かった。

帰り道、穴の中に見えるのは……青い海。青い海だ。

謎だ。

その後もその穴の中に見えるものは日々変わっていった。かわいい猫や美しい夜景、光り輝く宝石の山。

これは一体何なのだろうか。とは思って穴の中に手を入れようとか首を突っ込もうとは思わない。

どうせろくな事にならないし。

その日の帰りは腹が減っていた。ひたすらに空腹だった。

購買の方でなにかトラブルがあったらしく、われわれ非弁当勢は悲しい昼を過ごした。

そんなもんだから早く帰って飯食う事だけ考えていた。穴の中に見えるのは美味しそうな食べ物。

焼き肉ラーメンカレーにハンバーグ。

圧倒的な物量がひしめきあっている。

それを見てまさかと思つた俺は早足でその場を去り食べるだけ食って次の日に備えた。

朝、起きた俺はある事だけを考えて穴の前まで行った。

そして穴の中に見えるのはたくさんの可愛らしい犬達だった。なるほど、思つたとおりだ。

この穴は自分が心の中で望んだものを見せてくれるらしい。改めて思う。これはなんだ？

何故こんなものが見えるんだ？

最初は気にもとめなくなかつたその事が今ではこのぎまだ。踏み込んではいけないものというのはいささか事なのだろう。

最早その存在を頭の中から消す事は出来ない。そして穴もそれに答えた。

その日穴の中に見えたものはいつもとはまるで違っていた。

穴の中にいたのはあの男。  
夢で何度も見たあの男だ。

これが穴の答え。

何故こんなものが見えるのかという俺の思いにこの穴が答えてい  
る。

しかし、俺はそれを立ち止まって見ようとはしない。

あくまでも登下校の時間、通学路を通る時にたまたま目にするだ  
けのもの。

そういうことにしないと、そうでもしないと、足を止めあの穴の  
中で起こる事を見続けていたら。

その先になにがあるかは分からないが、きつと俺はもう二度と戻  
れなくなる。

そんな確信のない不安が心をよぎる。

あの穴を始めてみてから一週間が経った今日この日、俺はまたあ  
の穴を見る。

そこに映っているのはあの夢で見た男。

そして、一人の少女。

可憐で、儂げで、黄金の瞳を持つ少女。

男は何かを呟きながら少女の顔に手を近づける。

それを不思議な顔で見つめる少女。

俺は、走った。

その先に起こる事を見てはいけない。

本能が訴えかける。

わき目も振らずに走った。なにかから逃れるように。

息を切らせて足を止める。

心臓がバクバクしている。

あの先に起こる事、その意味。

母がいつか話してくれた昔話が頭をよぎる。

子供の頃の俺は外も歩けないくらい凄く体弱かった事。

俺の父が海外で事故に巻き込まれて死んだ事。

父が死んだあと、俺は見違えるように元気になった事。

それが答えなのか。

色々な考えが頭の中を駆け巡る。

そんな最中に何かの引っ掛かりが違和感を思わせた。

あの穴の中でこれからおこなわれるであろう事から目をそらした  
時だ。

あの少女は何故、あの時こちらを向いたのか？

何故その黄金の瞳で俺の事を見たのか。

それは偶然か、目の前の現実から目をそらそうとしたのか。

それとも、それとも。

不安で胸がいっぱいになる。

答えを得る事は簡単だ。

だがその簡単な事はなによりも難しい。

上の空で一日を過ごした俺はその日、遠回りしていつもとは違う

道で帰った。

すまない。許してほしい。

弱々しい謝罪の言葉。

傷だらけのゴツゴツとした手が目の前に迫る。

焼けるような痛みとともにこの世界は終わった。

終わるはずだった。

視線を感じて振り向いたそこには男がいた。

黄金の瞳で私を見る一人の男が。

黄金の瞳は真実を見る瞳。

黄金の瞳は真実を見る瞳。

目をそらしたところで、いつかあなたは真実と向き合わなければ  
ならない。

薄暗い部屋にカーテンの隙間から光が差し込む。

目覚めの時だと電子音を響かせるスマホのアラームを止める。

……これが人生で見る最後の夢でない事を祈ろう。